

## 対人関係における援助

大 坊 郁 夫

われわれは、幾重にも結びついた対人関係の中にあって生活している。このことが人間を理解する原点と言えよう。他者との比較においてわれわれは自分の特徴を知ることができ、また、自分を振り返りながら他者を理解できるものである。このように、他者の存在、その他者との相互作用によって展開される対人関係を具体化する過程自体において人間は自己を理解し、他者への影響を及ぼし得る社会的存在となっていく。このような過程において他者が必ずしも自分にとって肯定的な意味を持つばかりではなく、それによって不安や悩みを惹起されることもあるが、そう考えていってもそれを癒し得るのも他者の存在であろう。したがって、互いの結びつきを求めることが人間社会の基本と言い得るであろう。その基本的な主題として、「援助行動 (helping behavior)」を考えてみることにしたい。

援助行動とは本来対人的行為であり、援助を要する被援助者と援助者との関係があって成立する。要因的に言うならば、この他に、援助行動成立前後に相互作用を持つであろう、その状況内外の他者との関係、その場にいる他の潜在的な援助者、自分が援助した（あるいはしない）場合に自分に向けられる“評価”をくだすであろう他者（重要な他者：significant others, など）との関係も考えなければならない。援助とはこのような幾つもの層にわたる“対人関係”の中に成立するものなのである。

援助行動についての心理学的研究の発端は、1964年のアメリカのキティ・ジェノヴィーズ事件に典型的に見られる見知らぬ者の中での出来事であり、眼前の他者への援助が抑制されることへの素朴な関心からであった。なお、1986年1月の千葉県駅の酔客死亡事件、1989年9月の女子大学生殺人事件なども同種のものであり、潜在的な他者の存在が援助を抑制する傍観者効果は時と場所を越えて認められていると言わざるを得ない。

## 対人関係の次元

現実の場合では、様々な援助状況があり、しかも多様な対人関係が含まれている。対人関係の表現には、Knapp (1984) の指摘にあるように、親密さ、役割、血族性、時間的側面、人種・個人的特徴、行動の共有性など多くの方法がある。これまでの研究で得られてきた対人関係の次元を援助に関連した次元ということで概観してみると、例えば、Triandisら (1966)の研究では、サービシ的役割関係が、Wish (1976)では緊密な関係、協調・友好的関係が、Deutsch (1982) では協同-競争関係などが挙げられる。また、林ら (1984) は、ゲシュタルト的視点を持った一連の対人的オリエンテーションについての研究の中で、役割関係の次元性を検討している。男女大学生の評定結果を因子分析しているが、それによると、「緊密な-表面的な関係」「気楽な-緊張に満ちた関係」「公的・課題指向的-私的・情緒的關係」「上下の-対等な関係」とともに「協調的-競合的關係」因子が抽出されている。この最後の因子についてその因子得点を男女間で比較すると、男性の方で分散が大きく、この次元による視点に敏感であることがうかがわれる。また、関係概念のオリエンテーションに男女差があり、「寝たきり老人-ボランティア」については男女とも最も協調的と捉えているが、その程度は男性で顕著である (Fig.1)。「看護婦-患者」についても同様な関係にあるが、「被告人-原告人」などについては男性の方がより競合的に認知している。他の特徴も考え合わせると、平常タフ・マインドを持っているとされる男性の方が援助的關係に敏感であることが予想される。なお、この分析において「気楽な-緊張に満ちた関係」が抽出されているが、この次元は Wish らの欧米の研究では得られていない。このことから他者との関係に欧米よりも緊張を持ちやすく、対人恐怖や視線恐怖などの疾患がわが国に多く認められる (井上, 1982) こととも通じる日本人に特有な次元ではないかと考えられる。

### 対人関係における援助

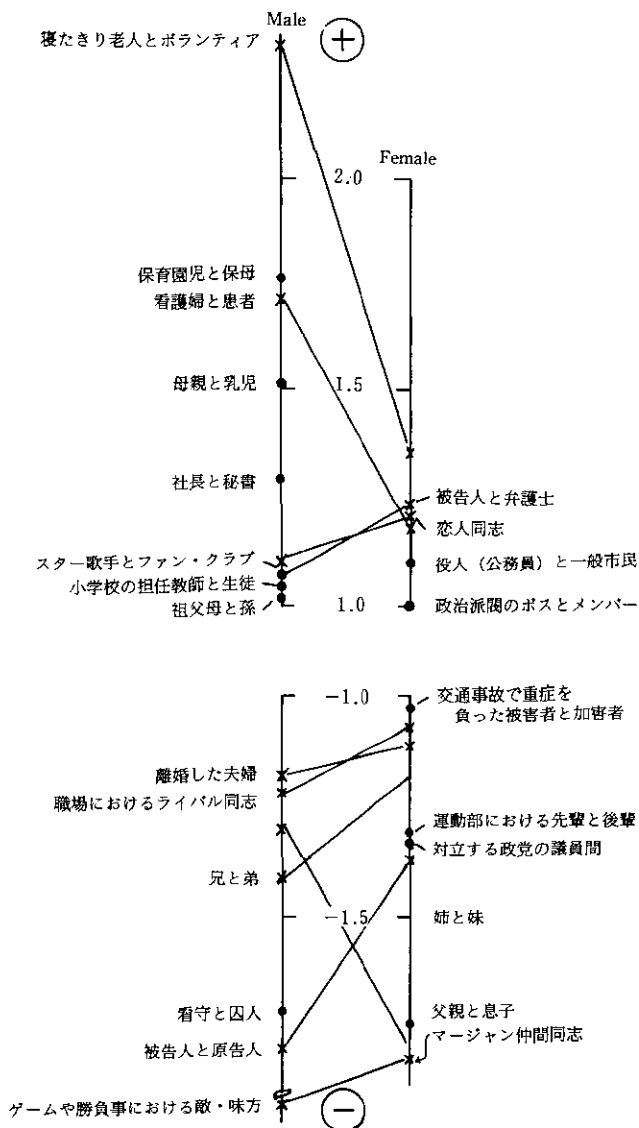


Fig.1 協調的関係—競合的関係因子の因子得点の比較 (林・今川・津村・大坊, 1984)

## 対人関係指向性における個人差

対人関係の実現に向かう仕方は個人差があり一様ではない。ゴードンと菊池(1981)は、対人関係価値尺度(KG-SIV)を用いて対人関係において個人が抱く基本的な動機パターンを検討している。この尺度を用いて、ボランティア活動従事者(20歳代から60歳代にわたる)と男女大学生の各関係価値次元の得点を比較したところ、同調的価値、博愛的価値についてはボランティア活動者の方が高く、支持的価値、独立的価値については大学生の方が高いことが示されている(Fig.2, 大坊, 1983)。

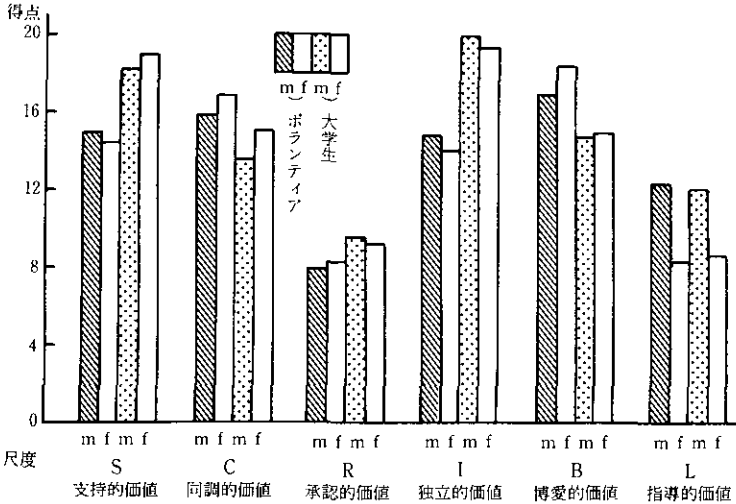


Fig. 2 ボランティア活動従事者と大学生の対人関係価値尺度得点の比較  
 ボランティア従事者(男51名, 女54名), 大学生(男149名, 女84名) 大坊(1983)  
 m: 男性 f: 女性

ボランティア活動に従事する動機は多様であろうが、かれらは、大学生に比べて愛他的・援助的傾向が強く、社会的に公平な行動をとることを重視し、他人からの包容的、支持的な扱いを求めず、自分の独自の考えを蓄え、それを基にして個人レベルで行動しようとはしない傾向が認められる。他人との協調的な関係を重視し、自分の利益を優先せず、社会的な正義を目指す傾向があることになる。ボランティア活動を始めた

動機との関係を見ると、支持的価値や同調的価値を重視する者は、ボランティア活動への動機が受動的であり、一方、独立的価値、指導的価値、博愛的価値を重視する者は、より積極的であった。また、動機のタイプ、ボランティア活動によって得た利点、悩みの有無、活動の持つ社会的意義を何におくか、個人属性（性別、年齢、職業、活動年数）を説明変数として博愛的価値尺度得点についての数量化I類による分析を行ったところ、この価値指向は、若年者かある程度活動年数を経たベテランに高い傾向があり、活動することに悩みを強く持つこともなく、自分のしていることを当然視し、自分の力を傾注するという没入型の活動特性を持つことと関係していることが知られる。また活動の目的として目指す内容と対人関係価値観とも密接な関連があり、直接的に他者への効果を重視する傾向は、支持、同調、独立、博愛的価値と、自分を磨くことに注目する傾向は、同調、承認、博愛、指導的価値と、抽象的に社会的な波及効果を目指す傾向は、同調、独立、博愛、指導的価値と関係している。そしてボランティア活動の社会的意義を人間同士の結びつきに見いだす者は、博愛的価値に、個人の自立に見いだす者は指導的価値に、地域社会作りに見いだす者は承認的価値に重きをおくことが知られている。このように、個人の特徴によって、援助への向い方が異なり、個人に合った援助の仕方は多様であり、それぞれにあると言える。

## 対人関係の過程

対人関係は相互作用を通して具体的に展開されていく。その過程は一方の働きかけ（コスト）とそれに対する他方の評価・応答（報酬）の連鎖系列と言える。援助の過程もこの社会交換的な見方で把握することが可能である。Turner, Foa, & Foa (1971)は、交換されるもの（resource）は具体性（concreteness）-愛と金銭-、と個別性（particularism）の次元で表現できるとしている（Fig.3）。それによれば、例えば「愛（love）」は個別性が大きく、具体性は中間的、「サービス・奉仕行為（service）」は具体性が大きく、個別性は中間的とされている。この視点を基にして、Turnerらは、与えられた資源に対する返礼として選択された資源の種類とその選択強度を検討している（Fig.4）。それによ

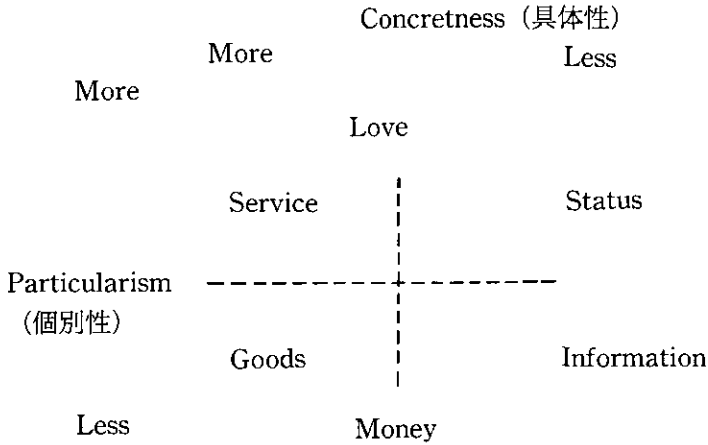


Fig. 3 対人関係で交換される資源 (resource)  
Turner, For & Foa (1971)

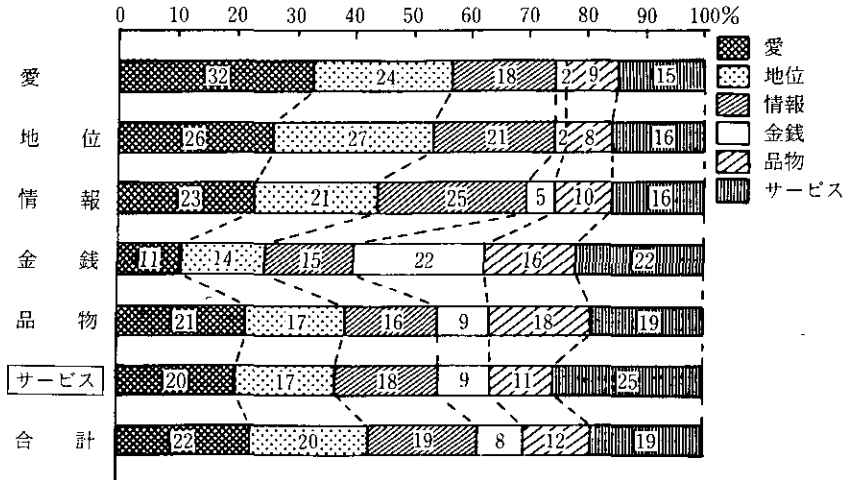


Fig. 4 与えられた資源に対するお返しとして選択された資源  
Turner, Foa & Foa (1971)

対人関係における援助

Table.1 お礼として最も好まれる資源  
Turner, Foa & Foa (1971)

Resource	Resource returned						
	Love	Status	Information	Money	Goods	Services	All resources
Love	—	65	10	0	2	23	100
Status	62	—	20	10	3	5	100
Resource information	17	34	—	11	24	14	100
Received money	0	16	8	—	60	16	100
Goods	6	5	21	55	—	13	100
Services	41	18	7	16	18	—	100
All resources	21	23	11	15	18	12	100

ると、愛、地位、品物については愛が最大となっている。しかし、サービスに対してはサービスが最大、次いで愛であり、情報については情報、愛、金銭については金銭とサービスが同等に並んでいる。基本的には金銭を除いて返礼として愛が選択される傾向があること、資源と同種の資源が選択される傾向があることが示されている。また、返礼として好まれる資源については、提供資源以外の種類について比較すると、品物については金銭が金銭には品物が期待されることの他に、地位とサービスについては愛が突出しており、また愛についてもサービスの割合が大であることが特徴的であり、この両者の交換的な関連が密接なことが知られる (Table.1)。これらのことは社会的交換の対象が必ずしも等質のものでなくとも成立すること、かつその場合にはそれぞれの提供資源に対応した交換資源のあることが示されている。

ところで、対人関係や対人行動を把握するためには要因を部分的に抽出していくというアプローチでは尽くせない点がある。さらに援助は広範な波及効果をもたらすものである。したがって、その状況としての特徴と、そこにいる者の諸特徴の全体を眺望した捉え方が必要になってくる。援助についての研究はこれまで多面的になされている。例えば、援助についての心理学的研究の発端であるが、要援助状況での潜在的な援助可能者間の対人関係、さらに緊急を要する事態と非緊急の事態が、あるいは援助者の個人属性などは主要な要因であり、多くの検討がなされている。Fig. 5 は、状況の構造を示したものである (Brown & Fraser,

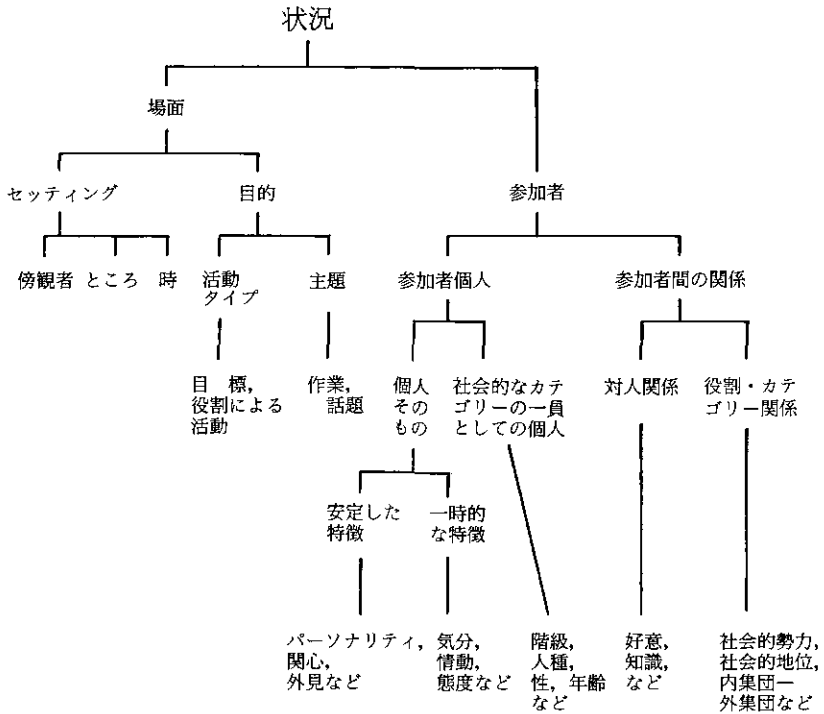


Fig. 5 状況の構成因 (Brown & Fraser, 1979)

1979)。この構造の中で、セッティング、目的については概ね研究の対象となっている。しかし、援助“状況”を眺めた場合、相手との関係における目標が何か、その場の参加者の役割・カテゴリー関係（地位の差は一方にとっては防衛的とならざるを得ない、など）などは、十分には明らかにされていない。また、援助の過程はいくつもの段階を経るものと考えられている。Argyleのモデルの要因と過程を詳細に捉えたCook (1971)の拡張版社会的スキルモデルに基づくと、相手である被援助者の訴えをどう捉えるか、その“要援助状況”にいる者に期待されることは何か、この場合、社会的な、個人の経験によるルールによって、推測がなされる。そして、相手との関係などを踏まえて“相手の要求を充足す



る”という目標に立てばその要求充足のための行動が選択され、実行にいたると考えられる。例えば、ここでルールが社会的なものか個人的なものかによって個人を超えたステレオタイプな状況行動か、その個人に特異的な行動かがとられる。さらに、他者に向かう行動を考えた場合、その行動生起のための認知的枠組みが存在する。しかも、その枠組みの客観的な特性ではなく、認知された（主観的な）特性に人は左右される。このモデルは、対人認知の過程を想定した見解であるが、後の Bar-Tal (1976) などの援助意思決定過程についての見解とほぼ合致するものと言える。

### 対人関係の発展段階への注目

既に触れたように、対人関係の基本次元には“援助”に向かう特質が含まれているものがある。さらに、相手との関係によって援助に向かいやすい場合とそうではない場合とが想定される。それと同時に、対人関係は発展・変化しうるものでもある。全ての関係において、対人要求のあり方は一つではない。関係の成立から発展（結合）の過程と関係の停滞から終焉（分離・独立）の過程とでは各々の段階で目指される目的は異なる。このことからすると、援助の定義にも関わるが、その段階に応じて援助の内容も異なると考えられる。相手との関係の段階は援助行動に影響すると考えられる。被援助者が未知の者であるか、友人であるかによって援助の量が異なるというだけではない意味が推測される。即ち、ある段階の他者については援助として機能する働きかけが、例えば、友人の場合には同等の意味を持つこと自体疑わしいことも考えざるを得ないであろう。それは両者の間にある親密性と相互作用の密度が“援助的”働きかけを増幅、補完することが予想されるからである。これまでの多くの研究で結合的な面が強調されてきたが、援助に“自律、独立”の意味を付与した視点は多くはない。この視点によって、援助行動は多元的な構造を持つにいたる。

## 援助行動への均衡回復過程としてのアプローチ

援助行動は収束的に特定の行為として規定しうるものではない。援助にいたる動機によって、順社会的(愛他的、賠償的)、自己中心的などと分類できる。被援助者にとってはいずれも自分のためになることではある。行動現象は同じであるが、援助者の心理状態も援助行動後の働きかけも異なるので、援助の内容や類型については区別して考えなければならない。この点については、高木(1982)のクラスター分析、因子分析による包括的類型論が示唆的である。それによると、社会的規範、個人的規範、援助に伴うコストの点で整理できるとされている。しかも、同一個人が状況や相手の持つ特徴に関わらず、誰に対しても同じ援助行動をとるとは限らない。

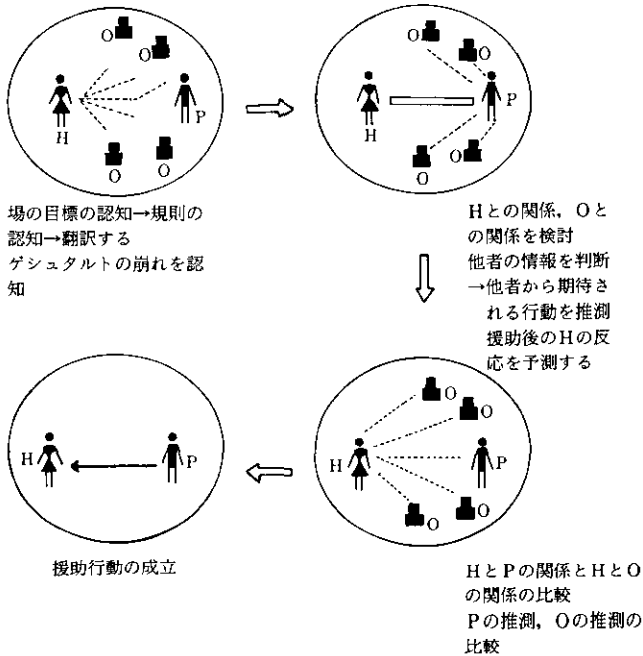


Fig. 6 援助行動過程における“対人関係”の関与

- H：要援助者
- P：当事者(援助者)
- O：他者

援助行動の成立についてはいくつかのアプローチがあろう。ここでは、Latané & Darley(1970)の見解をも参照して、状況としての場と個人との相互作用的視点で考えてみることにする(Fig.6)。先ず、状況のバランスの崩れを認知することに発し、それを回復する過程として考えられる。Cook(1979)のモデルをも踏まえて考えてみると、先ず自分のいる空間において行動のルールを理解し、それに添った行動をとることを目指すことが前提要因である。そして、その場において要援助者がいることを認知する。そこでなんらかの形で援助行動が期待されることを理解する。この段階においては自分だけのことではなく、援助可能な他者を含めて援助要求を察知する。援助が必要であり、援助行動が期待されることを知る段階である。次に、この種の場合では多くは経験が乏しく、行動選択は即座にはなされない。そこで、援助可能者はこの事態をどう解釈しているのか、またどう対処するのかを観察し、推測する。さらに、要援助者の具体的要求の内容およびその妥当性を検討し、相手との関係(知己か、負目の有無など)、他の援助可能者が自分に抱いている期待、自分が援助した結果を相手やその他の比較可能な他者の評価への懸念を考慮する。自分と要援助者との関係、自分と他の援助可能者との関係を検討する段階である。このような予測に基づいて、要援助者と自分との関係と要援助者との援助可能者との関係を比較する。自他の結果期待の比較である。そして自分の行動後の結果期待の方が大きければ援助行動がとられ、したがって要援助者の要求は充足され、場の緊張も低減してバランスは回復される。このように自他関係の認知から始まり、関係の比較及び各関係に由来する結果期待の比較など何層もの対人関係が関与して場全体のシステムが保全されるのである。

このように援助は基本的に環境におけるバランス回復の過程と捉えることができるが、その枠組みの中において、コストと報酬との交換行為が成立すると考えることもできる。交換の過程はさらにそれを含む全体の中でシステムとしてのバランスを成していると考えられる。とりわけ賠償的援助や援助行為が時系列的連鎖を持つ場合には互惠性の原理が作用すると考えられる。また、公平(equity)の視点も重要である。これは対人関係のバランス維持を前提とした枠組みの中での交換過程を扱うものとも言える。例えば、一般に無償の援助に対してはその背景、動機に疑

念を抱きやすいことなどは公平原理の持つ一般性を示している。

Gergenら(1975)は、日本、アメリカ、スウェーデンにおける援助に伴う義務(costの一種)、援助者の資源(resource)及び援助者の援助への努力とを実験的に検討している。その結果、わが国においては、贈り主への魅力は過大な返礼義務を要する条件、過小な返礼義務条件に比べて提供された援助と同等の返礼義務のある条件において最大であり、公平指向が強いこと(Fig. 7)、さらに援助提供者の資産が大きい場合よりも小さい場合に提供者への魅力は大きいことが顕著であった。“持てる者”の援助を当然視する傾向が鮮明である。日本では強化的なルールよりもバランス指向の強い公平論的ルールに依拠する傾向が強いこと、さらに持てる者の典型とも言い得る公的制度による援助(制度としての福祉)を当然視する傾向が認められるのではなからうか。これに対して、個人レベルの自発的援助は注目されやすく、魅力の対象として認知される程度が欧米よりも強いと予想される。その背景にはこれまでの制度依存的体質と対人的交流をベースとした個人レベルの援助が多様に展開されてこなかったことも影響していると思われる。

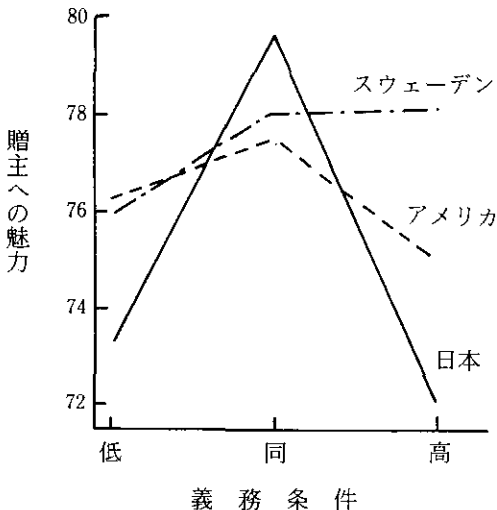


Fig. 7 お返し義務条件ごとにみた贈り主への魅力  
(Gergen, Ellsworth, Maslach & Seipel, 1975)

## 時系列としての援助

援助は時間的な広がりを持つ過程である。要援助者への援助行動は数次にわたるステップを経た波及性を持つと考えられる。これまでの多くの研究においては、1次段階での直接的な援助行為を対象としている。しかし、時間的な軸を拡大して眺望した場合、数次のステップを経て結果的に“援助”にいたる場合が考えられる。即ち、一定の時間が経過してからその成果が肯定ないし否定できるかが明らかになることがある。この点に関連するものとして、相手からの評価が時間的に変化した場合に、評価者への魅力度が増幅されて異なることを示した Aronson & Linder (1965) の研究が挙げられる。肯定的評価→肯定的評価よりも否定的評価→肯定的評価の方が評価者への魅力度が高く、否定的評価→否定的評価よりも肯定的評価→否定的評価の方が評価者への魅力度が低いことが示されている（これを gain-loss 効果という）。一種の対比効果と新近効果に基づく増幅効果である。援助の系列についても同様な効果は予想される。一貫した援助よりも低援助・無援助→高援助の方がインパクトが強く、援助としての認知が鮮明であり、効果的と考えられる。時系列としての援助を対象として、その過程をさらに詳細に検討する余地が大きいと思われる。現実場面ではある行為が援助になっているのか否かは後になって判明することが少なくないと思われる。この点についての研究はさらに必要であろう。

一般に、相手との知己になる (acquaintance) 過程を考えると、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論の言うように、その初期では援助の量も内容の密度も急速に増していくと考えられる。互いの関係が進展するにつれて相手との結びつきの内容が吟味され、しだいに量から質の充実へと向かうと考えられる (Fig. 8)。援助は要援助者の“ために”と規定されるが、その判定は誰が行うのであろうか。多くは援助を仕向ける者自身の判断によっていると言えよう。そこからさらに、受け手としての要援助者内部の心的過程への注目が必要と考えられる。即ち、差しのべられた援助がどう受け取られるのか、とりわけ自尊心との関係は重要であろう。援助と判断された行為が相手に対して肯定的、否定的と両面の効果を持つ場合が有り得る。さらに、プライバシー重視の程度には地域

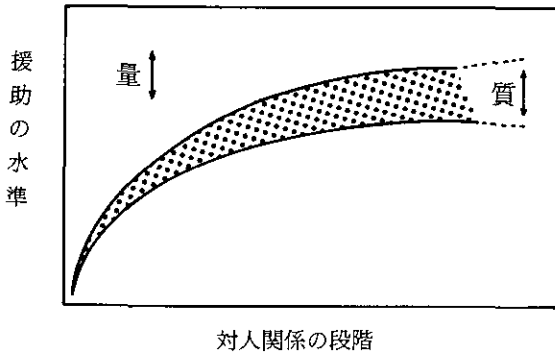


Fig. 8 対人関係に応じた援助は

的差異があり、菊池(1986)の指摘したようにマチ的關係においては他者の関与の低さが、一方、ムラの關係においては関与の高さがのぞまれる。このことからしても援助提供とその効果の間には必ずしも直線的な関数關係はないと言わざるを得ない。

対人關係は気づき、接近に始まり、相互作用を強化し、自己と相手との共有部分を拡大し、一体化を目指す。また、その一方で、単位を解消して差異を強調し、接触自体を回避しようとする方向性もある。即ち、段階に応じて相互作用の主題が異なるのである。例えば、崩壊に瀕している夫婦に（これは回避段階にある）互いの結びつきを回復しようと働きかけることは援助に当たるであろうか。どこで方向を転ずるかは容易に判断できないが、この場合互いの自立を促すことが適切な主題であろう。段階によっては同一の働きかけが正反対の効果を持つことを理解しなければならない。しかし、これまで対人關係の親密さについては定性的な研究しか概ねなされておらず、このような視点の変換は容易には明確化できていない。

### ボランティア活動に見る援助

継続的な社会的援助の例としてボランティア活動を取りあげてみよう。前出の山形県での調査結果（大坊，1983）によると、活動歴の長い者は、

活動によって自分自身の充実，人間性にとって得るところが大と捉えている。他に対しては奉仕的動機が強く，種々の集まりなどの具体的な対人関係を通しての他者からの誘いによって参加している傾向が認められる。これに対して、「自分の能力を発揮する」という自己主張的な動機や、「立場上やむをえず」，「学校，宗教の影響」という受け身的な動機を持つ者のうち活動歴の長い者は少ない。例えば，ボランティアスクールを卒業してから活動を始めたある人は、「自分はお金も地位もない。だけれども何かしたい。今の生活だけにとどまっていたは生きているのに何か相済まない思いにかられる。体でできることがあれば時間の許す限りしたい。それが自分の人生を有意義にするような気がしてならない。……………」と記している（p52）。あるスパンを持った援助行動を考えた場合，自分自身にとっての意義が最大の核になる“動機”と言えよう。

福祉的な関わりについて，例えば「サービスの積み立て方式」などのようにギブ・アンド・テイクの発想が出てきている。これはコスト報酬という賠償的な援助に近い。現状のバランスを前提とした交換論的視点を強調したものと言える。また，有償ボランティア活動の発想も次第に有力な見解の一つになってきている。しかし，現実の制度的不備を別掲とすれば，これによってサービスが変質する可能性を否定できない。一方で，活動のプロ化が進み（実際にそれが制度的に推進されつつある面もある），本来の自発的關係による紐帯の希薄化が懸念される。社会的援助の専門化，分業化が進むことによって，個人の自発的愛他的行動が抑制されかねないとも考えられる。現実の援助実現による要援助者の要求充足のための社会的制度，その活動の多様化を詳細に観察することによって援助の心理的過程の核となる援助者自身の愛他的動機の表現法については今後さらに考えていかなければならない。

援助は対人関係の過程において成立する対人的行為であり，多様な要因によって影響される。その対人関係にはタイプと段階が区別される。その各々に応じて目指される目標に違いがあり，援助の成立の仕方が異なる。また，援助行動は状況のバランスが崩れたところに要求されるものであり，場の緊張が高まり，それを解消するための力動性が見られる。即ち，援助は場のバランス保全の過程であり，その過程において社会的交換が成立すると考えられる。援助は，時系列的な連鎖をなしており，

当該の直接の行為で終わることではない。したがって、一定の時間的経過を経て成果が判明することが多く、視点の広がりが必要される。同一の行為が対人関係の段階によっては異なった効果を持つことも考えられる。これらの諸点を踏まえて対人関係過程としての援助を考えていく必要がある。

### 引用文献

- Altman, I., & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. Holt, Rinehart, and Winston.
- Aronson, N. H., & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- Bar-Tal, D. 1976 *Prosocial behavior: Theory and research*. Hemisphere Publishing Co.
- Brown, P., & Fraser, C. 1979 Speech as a marker of situation. In K. R. Scherer and H. Giles (Eds.) *Social markers in speech*. Cambridge University Press.
- Cook, M 1979 *Perciving others: The psychology of interpersonal perception*. Methuen.
- 大坊 郁夫 1983 ボランティアの意識構造の分析 山形県高齢化社会研究所紀要, 2(1), 37-61.
- Deutsch, M. 1982 Interdependence and psychological orientation. In V. J. Derlega & J. Grzelak (Eds.) *Cooperation and helping behavior: Theories and research*. Academic Press.
- Gergen, K. J., Ellsworth, P., Maslach, C., & Seipel, M. 1975 Obligation, donor resources, and reactions to aid in three cultures. *Journal of Personality Social Psychology*, 31, 390-400.
- ゴードン, L.V.・菊池 章夫 1981 増補価値の比較社会心理学, 川島書店
- 林 文俊・今川 民雄・津村 俊充・大坊 郁夫 1984 対人的オリエンテーションの研究(2) - 二者関係認知の構造について -。日本心理学会第48回大会発表論文集, 662.
- 井上 忠司 1982 まなざしの人間関係。講談社。
- 菊池 章夫 1986 思いやりを測る。こころの科学, 8, 22-27.
- Knapp, M. L. 1984 *Interpersonal communication and human relation-*



- ships. Allyn and Bacon.
- Latané, B., & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* Appleton-Century-Crofts. (竹村 研一・杉崎 和子訳 1977冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学。ブレーン出版。)
- 高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性。年報社会心理学, 23, 137-156.
- Triandis, H. C., Vassiliou, V., & Nassiakou, M. 1968 Three cross-cultural studies of subjective culture. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 1-42.
- Turner, J. L., Foa, E. D., & Foa, U. G. 1971 Interpersonal reinforcers: Classification, interrelationship, and some differential properties. *Journal of Personal and Social Psychology*, 19, 168-188.
- Wish, M., Deutch, M., & Kaplan, S. J. 1976 Perceived dimensions of interpersonal relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 409-420. (1989年11月16日)

〔付記〕

この論文は、日本社会心理学会第31回公開シンポジウム「援助」(1987年6月、於：北星学園大学)における報告を基にして加筆を行ったものである。

Abstract

Concept of "Help" in interpersonal relationship

IKUO DAIBO

"Help" is an interpersonal act in the process of interpersonal relationships, which is affected by some psychological variables.

It is known that interpersonal relationships have various types and levels of closeness. As the goals of participants' acting in relationship are different, the process of their helps have various effects. Helping behavior is required in the dissolution of situational balance. When this dissolution occurs, the dynamics of both increasing and reducing situational tension are seen.

Helping is the process of maintaing the situational balance which

occurs within the social exchange.

Helping is not only a one-step reponse to seeking for help, but it extends over along time as a temporal sequence. Therefore, we can know occasionally the results of helping behavior after much time passes. Cosequently we must expand the viewpoint of the helping process along the passage of time in relationships.

We have different views of the same act according to the level of intimacy in the interpersonal relationship with the actor.

To clarify the function and the structure of helping as interprsonal process,we have to pay regard to the helping process in consideration of the recovery of interpersonal balance within the temporal sequence.